初　詣

現在は大晦日の夜ともなると、各社寺では、篝火（かがりび）を焚き、照明をつけるなどして、初詣での参拝客を迎えますが、本来は元旦の祝い餅をすませてからお参りするものです。
元来、地域社会の守護神とされる氏神や鎮守の神に参拝したものですが、江戸時代より恵方参りといって、その年の吉とされる方角にある社寺に参詣する風習が盛んになりました。（ちなみに今年の恵方は　　です。）
神社での参拝のしかたは、まず御手洗（みたらし）で手を洗い、口をすすいでから神前に進み、お賽銭を上げます。次に二礼して、左右の掌を少しずらし、それから両手の掌を合わせて二拍手し、両手を合わせたまま祈願をします。最後に一礼して参拝を終わります。
この動作の意味は、心身を清め、供物〈お賽銭〉を差し上げ、頭を下げることで神への敬意を表します。左右の掌をずらすのは、神と人とがまだ一体になっていないということで、次の二拍で神を招き、そのあとで掌を合わせると神人合一になり、祈願をこめて神の力を体得するのです。そして最後の一礼で神を送りかえしますが、これは祭りの基本といえるものです。

お正月行事の『トリビア』

鏡　開　き

鏡開きは、鏡割りともいいますが、割るとか、切るという忌み言葉を避けて、鏡開きといいます。
これは中国の風習で、元旦に、にかわのような固いあめを食べて延命長寿を祝福する儀式がありました。それが日本に伝わり、宮中の「歯固め」の行事となったもので、鏡餅のような固いものを食べる風習になり、「鏡開き」を行うようになったといわれています。
鏡開きが行われるようになったのは、中世の武家社会になってからです。当時、武家では鏡餅を、鎧兜などを収める具足櫃の上に飾っていたので、具足開きといい、雑煮を食べることを「刃柄（はつか）を祝う」といいました。
もともと、正月二十日に行っていましたが、徳川三代将軍家光の忌日にあたるので、承応年間から十一日に行われるようになりました。今でも地方によって違いますが、多くは十一日の行事となっています。
なお、鏡餅は刃物を一切使わず、手や槌で割るのがしきたりです。これは武家の習わしをまねたものですが、武士の象徴である具足に飾った、神への供物に刃を立てることを嫌ったからでしょう。

[インターネット調べ]